
ふくいミュージアム

1994.10.30

No.26

福井県立博物館



「まんし天神」(P.3~4参照)

中国浙江省の博物館視察

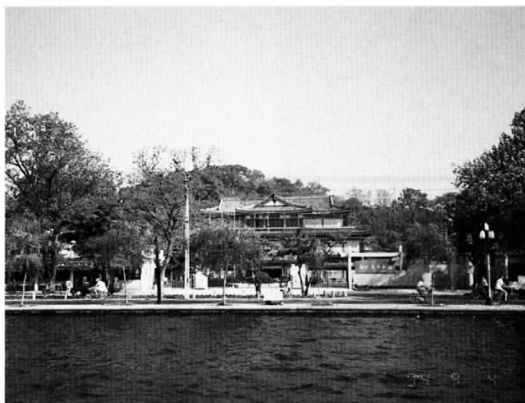
平成6年9月2日～9月9日まで、福井県文化芸術交流協議団の一員として浙江省内の文化施設を見る機会をえた。協議団派遣の目的は、平成5年10月に両県省が友好提携に調印したのを契機に、交流の推進を図るべく、図書館、博物館、美術館による協議団を派遣し、交流の具体化へ向けて協議を行うことであった。

視察地は浙江省内の杭州市、紹興市、寧波市を訪問し、杭州市では、浙江省博物館、浙江省自然博物館、中国シルク博物館、南宋官窯博物館、中国茶葉博物館などを見学し、紹興市では、蘭亭書道博物館、紹興魯迅記念館、紹興民俗博物館、寧波市では河姆渡遺跡博物館を訪れた。以下、印象に残った施設を紹介し、現状を述べて見よう。

浙江省博物館

1929年に建てられた西湖博物館が前身であったが、建設からかなりの年数がたったので、平成2年からリフォームが行われていた。あと一ヶ月あまりでオープンということで、各棟の展示が急ピッチで進められていた。今回の視察の目的が交流の具体的協議であることもあって、浙江省文化庁外事所の副所長、博物館の副館長と懇談する機会があった。

この博物館はかつては自然科学が展示の主体であったが、いまでは自然系が独立して、「浙江省自然博物館」として開設されている。館藏品は約10万点を数え、青磁が主体を占めている。収蔵庫は見学で



西湖のほとりに建つ浙江省博物館



中国シルク博物館外観

きなかったが、オープン前の展示室を見ることができた。展示室は5ブロックに分かれ、時系列に沿った通史展示と磁器や書、絵画などの部門展示とで構成され、展示面積は約4000㎡におよぶ。職員は総数108人で学芸員に相当する人員は70人を越えている。

過去の画一的な展示とは比べることのできないほど、見事に改善が行われていた。

中国シルク博物館

国家レベルの博物館で、約5ヘクタールの広大な敷地に、当館と同じ規模の建物が、庭園を取り囲むようにして建っている。展示は5000年余にわたる中国シルク文化の発展過程が紹介されている序幕ホール、養蚕の過程をわかりやすく見せる養蚕ホール、精練や染色、プリントなどの過程を紹介する印染ホール、総合ホールの4つの部門から構成されている。

総合ホールは製品化された服飾の展示室と、ファッションショーや学術交流、貿易商談や貴賓の接待などに用いられる設備がととのっている。展示の導線にしたがって各室をまわり、中国のシルク文化の過去から現在までの発展過程を見てきた者には、博物館というよりは、問屋街の中にいる感さえ与える。日本では公立レベルでこのようなタイプの博物館は見当たらない。

中国茶葉博物館

ここも国家レベルの博物館で、1992年にオープンした。西湖のほとり、中国銘茶、竜井茶の故郷に建



シルク博物館内部

てられ、4つの建物が廊下と築山でつながっている。展示は5つの部門に分かれ、茶史、茶道具、茶習俗、茶事、茶にまつわる歴代文人の詩と書画で構成され、茶についての科学的知識や古今東西の茶文化活動を体験することができる。展示ホールのほかは、学術ホールやそれぞれ趣を変えた茶室があり見学者にたいして中国各地のお茶をサービスしている。また展示には、現代茶芸・古代茶芸・日本茶道・台湾茶道を楽しむコーナーも設けられており、中国人民の茶葉に対する認識の深さを感じさせ、茶だけを取りあげた部門館として、よくまとまっているとおもわれた。

ただここでもシルク博物館で見たものと同じような物産が幾つもの部屋に分かれて売られており、お茶にかかわるものだけで良いのにな、と思いつつまた見てしまった。

南宋官窯博物館

ここもどちらかといえば新しい博物館で、南宋時代(1127~1279年)の宮廷用の磁器を焼いていた窯跡に隣接して建てられている。杭州はもと南宋の首都臨安であった。博物館の建物は小さいが、展示室は宋代の建築様式をまねて作られており、出土資料と歴代の磁器の逸品、それをまねた現代作家の作品などで展示が構成されている。

建物を出るとすぐ近くに遺跡があり、見学用の廊下でつながれている。遺構は幅2m、長さ約40mの窯本体と800㎡の作業場が完全な形で残っており、しっかりと覆屋で囲われている。日本と比較すると規模の大きさと迫りに圧倒される。遺跡と博物館がセットになった、いわゆる遺跡博物館のタイプ

である。世界最古の稲作遺跡として有名な寧波市の河姆渡遺跡博物館も同じ種類の博物館である。

本県では性格は異なるが、一乗谷朝倉氏遺跡があげられる。

今回の視察では、浙江省内の代表的な施設を瞥見したに過ぎなかったが、その多くは自然環境に恵まれた場所に立地し、しかも規模が大きく、展示品はどれも現物で複製品はほとんど見当らなかった。複製品の多い当館の場合、その展示に苦慮し、みせかたに細心の注意を払っているが、今回見てきた中では、日本の場合もそうだが、建設の古い館でしかも逸品の多いところでは、展示にあまり工夫が見られず、陳列というイメージは拭えなかった。しかし最近建設された新しい館では、写真や図パネル、模型などを随所に取入れ、中国語がわからなくてもより一層深い理解が得られた。

中国では現在約1000の博物館があるといわれているが、社会歴史系の博物館に比べて、自然科学系の博物館が少ない。また運営は各級の政府によって行われているものが多く、企業部門が運営しているのは少ないが、上海や北京の一部企業ですでに建設が進められている。全体的には、各省、市、各自治区の地誌的性格を持つ総合的な博物館が多く、これは日本と同じといえる。

以上訪問の印象を述べてきたが、近い将来、浙江省の悠久なる遺産を波濤を越えて県民にも見せたいと思った。(仁科 章)



河姆渡遺跡博物館外観

資料紹介

夢楽洞「まんし天神」

「まんし天神」とは、江戸時代後期から大正期にかけて福井城下(のちに福井市)で代々絵馬の製造販売を行ってきた、「夢楽洞(むらくどう)万司(まんし)」の手がけた天神画のことをいいます。

本来、「夢楽洞万司」は、江戸時代の明和～寛政期(1764～1800)に活動した初代(本名、万屋曾平)以来、その直系の絵師が代々世襲してきた雅号です。ところが、始期は定かではありませんが、明治初年には「夢楽洞」「万司」が屋号や姓のように用いられていました。「まんし天神」の呼び名も、「万司」が描いた、あるいは「万司」が販売元の天神画という意で、いつしか派生したものと思われる。この語は現在、福井市内の一部の表具師の間に伝えられています。

○

ところで、福井県では嶺北地方を中心に、正月に天神画(軸装)を飾る風習がみられます。これは長男出産の際に妻の実家から贈られたものを床の間に掛ける習わしです。しかし、それがかつて武士、町人、農民の何れの身分・階級を中心にした習俗であり、いつごろから広まったものかは定かではありません。また、同じ嶺北地方でも丹南地域のように、どちらかといえば天神の木像や泥人形を飾ることがさかんなところもあります。天神をまつる風習については、まだまだ不明な点が多く残されているのです。

○

さて、ここに紹介した「まんし天神」の最大の特徴は、上半身だけが描かれていることです。人物を画面いっぱいに大きく描き、見る者にとっても強い印象を与えます。台座と座像のすべてを描く一般的な天神画(座天神)にくらべ、たいへん大胆で迫力のある構図になっています。そういう点では、江戸時代後期の東洲斎写楽や喜多川歌麿に代表される役者大首絵に酷似しているのです。たとえば、写楽の代表作「市川蝦蔵」の画と比べてみると、そのことがよく分かります。

さらに、やや細かな点でいうと、天神が右手の小指をかるく伸ばす仕草が、画に微妙な動きをもたらし、学問の神様という硬いイメージをやわらげる効

果をもたらしています。いかにも天神が、型にはまった伝統的なポーズにしびれを切らしているかのよう

○

に映ってきます。この小指の仕草も、歌麿の美人画によく見られるものです。こうした点も、やはり「まんし天神」が浮世絵の影響を受けていることを裏付けています。いずれにしても、天神画としては型破りの作風であったといえます。

さらにまた、「まんし天神」のもう一つの特徴は、紙本に比較的安価な岩絵具(顔料)を使って彩色されていることです。その仕様をみるかぎり、決して高級品を志向したものではなく、これも絵馬と同様に、一般庶民に購買層を求めたものであったと考えられるのです。

夢楽洞は、絵馬や天神画に今をと きめく浮世絵の作風を取り入れ、これらを庶民が手の届く安価な商品として売り出すことに成功したのでしょう。もちろん、その背景には地域における民衆文化の隆盛と広まり、つまり庶民向きの工芸品が人気を集めた社会状況が想起されます。しかしその一方、夢楽洞の商法が、それをさらに推進する牽引力となったことも見過ごせません。夢楽洞による絵馬や天神画の製作、そして商品の普及・流通システムを解明することは、より構造的に民衆社会の動向を把握することになるのです。

○

とくに「まんし天神」の場合は、まだ十分な調査が行われていません。本来、天神画は絵馬のように神社に掲げ、人びとに公開するために求められたものでなく、よってこれを調査すること自体が容易ではありません。さらに加えて、それが伝統的な形式なのか、今のところ画面に年号や作者の雅号を記した

ものが見つかっていません。そのため、製作年代を判定する確実な基準も得られていないのです。

今後は、嶺北地方を対象に、とりあえず「まんし天神」の地域的な分布状況を明らかにし、製作年代や雅号の記されたものがないかを確かめていく必要があります。そうした意味でも、多くの方々からの情報提供が何より望まれます。どうか、この調査・研究にご協力をお願いいたします。（笠松雅弘）

(付記) 夢楽洞の絵馬に関することは、当館の第16回特別展「絵馬/EMA GALLERY」の図録(1993年4月18日発行)を参照ください。



「まんし天神」

夢楽洞の子孫、大岡家に伝えられたものです。



比較参照：写楽の役者絵の構図

(「市川蝦蔵の竹村定之進」部分改写)



比較参照：歌麿の美人画の構図

(「高輪の女」部分改写)

『浮世絵聚花』(小学館)より

夏のこども向け特別企画

恐竜王国ふくいこどもサマースクール'94

～こどものための最新恐竜学講座～

8月の12日13日に当館主催で行われた「恐竜王国ふくいこどもサマースクール'94～こどものための最新恐竜学講座～」を紹介します。

恐竜についての最新知識を学び、発掘現場を体験する。そして全国の子供達が恐竜を通じて交流することを目的に、この企画が開催されました。サマースクールの名誉校長に東京大学名誉教授の竹内均先生。校長に放送大学教授の濱田隆士先生。講師は、国立科学博物館古生物第三研究室長の富田幸光先生。恐竜マンガ家のヒサクニヒコ先生。当館の主任学芸員の東洋一先生にお願いしました。対象者は小学校5・6年生で、全国から500名が参加してくれました。

サマースクール第一日目

会場である福井市のフェニックスプラザは、受付開始前から子供達でにぎわっていました。500人が、20の班に分かれて団体行動を取るようになります。

はじめに濱田校長先生から「大人も子供も恐竜が大好き。みんな恐竜とちょっと仲良しになろう」と開講のあいさつがありました。

そして「ザ・ダイノソア1」というビデオを見ます。このビデオでは、初めての恐竜の発見、名前の由来、定義などを実際の研究者も出演して解説しています。

予備知識もできたところで講義の開始です。先生方にはテーマをしばって講義をしていただきました。



〈質問教室〉



〈恐竜画教室〉

濱田先生は「恐竜の一般的知識」について。富田先生は「脊椎動物としての恐竜」について。ヒサ先生は「恐竜の姿の復元」について。東先生は「福井産の恐竜」についてです。子供達に理解しやすいように、写真や図を使って話をされていました。20分と短い講義でしたが、最新知識を満載した内容の濃いものだったのではないのでしょうか。

次は恐竜なんでも質問教室です。日頃の疑問や講義でわからなかった所を聞くチャンスです。ここでお兄さんお姉さん達が質問を上手にまとめて、班ごとに1つにまとめます。質問には「恐竜の色は?」「足跡の化石が残るのは?」などがありました。先生方はていねいに答えておられました。

疑問がはれたところで、ヒサ先生による恐竜画教室です。「恐竜はこういう生活をしてただろう」と考えて描いていた子もいました。椅子を机替わりにして描く子、寝ころんで描く子、持ってきた恐竜図鑑を参考にして描く子と様々です。ときどきヒサ先生が見回りに来て「これはいいねえ」「おっ、上手だね」とほめられていたようです。

サマースクール第二日目

今日はいよいよ発掘現場へ行く日です。みんな眠い目をこすりながらもちゃんと集まりました。京福福井駅（この日だけ「フクイリュウ駅」と名前が変わっています）では恐竜電車が出発を待っています。1台目には勝山市のキャラクター「チャマゴン」が、2台目には福井県産の恐竜達がいっぱい描かれています。講師の先生方も一緒に乗り込んでおられたので、昨日聞けなかった質問をしたり、宿題の恐竜の絵を見てもらったり、サインをねだったりする子も

いたようです。約1時間で京福勝山駅（同じく「カツヤマリュウ駅」となっています）に着きました。

勝山市民会館で、竹内均先生から地球の歴史と恐竜についての講演をしていただきました。そのあと、宿題だった恐竜クイズの答え合わせを富田先生にさせていただきました。ちゃんと講義を受けたので、みんなほぼ満点だったようです。これでサマースクールを修了できます。竹内先生から修了証を受け取って、みんなにっこりです。

次はお待ちかねの発掘現場の探検です。発掘現場は山奥なので500人が一度に見ることができません。2組に分かれて見学することになります。他の組が行っている間は地場産業センターで恐龍展を見学します。ここには発掘現場で見つかった化石や全身骨格模型が展示されていました。



〈発掘現場までの山道〉

恐竜化石発掘ニュース

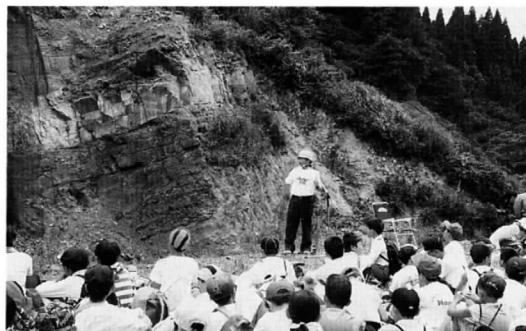
フクイリュウ全身骨格復元はじまる

博物館では夏から、勝山市北谷町で発掘したフクイリュウと呼ばれ親しまれている、イグアノドン科の恐竜の復元作業が始まりました。これは、日本で最初の恐竜全身骨格復元となります。

復元作業は、中国科学院古脊椎動物古人類研究所の董枝明教授の指導のもと、博物館に展示している同じイグアノドン科のプロバクトロサウルスなどを参考にを行っています。

今後、石膏で最終的な形を決め、さらに型どりをし、特殊樹脂でしあげます。今年度内に組立てを終了し、ロビーに展示する予定です。

(川越光洋)



〈発掘現場での説明〉

発掘現場までは1時間の山道を歩かなければなりません。この日は晴天に恵まれてかなりの暑さでしたが、お目当ての現場が見れるとあって、つらくとも懸命に歩きます。

現場では東先生から、目の前にひろがる崖の地層のことや、1億2千万年前にここに恐竜がいた証拠が足跡だということなどを説明していただきました。

これでサマースクールの全課程が終了しました。恐竜電車で福井へ戻ると、講師の先生方が出迎えてくれます。

「恐竜についてもっと知りたいと思うようになった」とか「他の県の子と友達になれた」という言葉を聞くと、私達もうれしく思います。短くて忙しい2日間でしたが、得るものも大きかったのではないのでしょうか？みなさん、お疲れさまでした。



〈董先生の指導による復元作業〉

情報をお寄せください。

鏡(かがみ)



柄鏡 (鶴丸文・長34.3cm)



柄鏡 (富士山図・長33.7cm)

- 近世まで使われた、金属製の鏡をさがしています。
- 古代までは、多く信仰の対象や呪術の道具として使われました。
- 近世以降に化粧具として普及し、作者銘の入ったものが多くなります。
- 鏡は、金属工芸の技術や女性の生活史を解明するてがかりとなります。



鏡 (蓬萊図・径12.2cm)

ふくいミュージアム
No.26
1994.10.30発行

編集発行 福井県立博物館
福井市大宮2丁目19-15
〒910
☎0776-22-4675(代)
印刷 株式会社エクシート

